

「砕かれた青春（ソ連抑留記）」

秋元武夫

昭和19年8月15日、陸軍特別操縦見習士官として宇都宮飛行
学校に入隊する。以降前橋、立川、満州の佳木斯飛行場、哈爾濱の
航空司令部、公主嶺の第二航空軍第一教育隊等転々とし、そこで私
達は、玉音放送により戦争が終わったことを知る。8月17日、吉
田少佐のもとで列車にて南鮮へと発車した途端、ソ連軍により突如
停車を命ぜられ奉天駅北の文官屯駅で待機することになり武装解除
が行われた。隊内は一挙に「穏健派」と「交戦派」に分かれ、離隊派
も出る。私は交戦派の五本大尉の指揮下に入る。八路軍（※1）や
満人（※2）と対敵行動を行い、高粱畑を逃げ隠れし、ついに力尽
きソ連の軍門に下る。その行動中、泥に塗れた日本婦人の遺骸に遭う
が、私達も手の施しようもない。高粱を刈り遺体を覆って別れを
告げた。この間、吉田少佐は敵状を見に行き帰らず、塚本中尉は
大腿部に被弾し手投弾により自決、隊員も少なくなり、奉天の鉄路
学院（日本兵収容所）に入らざるを得なくなった。ここで見たのは
顔を黒くし、坊主頭の軍服を着た若い女性、ソ連兵が見回りの時は

私達戦友の陰^{かげ}にかくまったが、私達が黒河^{こっか}に向かった後はどうなっ
たか。また、柵^{さく}を乗り越えようとして射殺された日本兵^{じごく}、地獄。

一、黒河^{こっか}へ・・・

奉天^{ほうてん}駅から貨車^{こっか}で黒河へ、私達の所持品^{うむ}をソ連兵は有無^むを言わさ
ずひったくってしまう。扉^{とびら}は鍵^{かぎ}がかけられ、40人^づ詰め^づの貨車は用
便^まも儘^まならず風^せに攻められた毎日である。黒河^{こっか}は、多くの日本兵が
黒龍江^{こくりゅうこう}を渡る前^{わた}に泊^とまったため、燃えそうな物^{かいむ}は皆無^{ほくまん}、北満^{ほくまん}の10
月^{だれ}は寒い。戦友^{かた}と肩^{かた}を寄せ合^{だれ}って過^{だれ}ごした1週間、誰^{だれ}が歌^{だれ}い出した
か「国境^{こくけい}の町^{まち}」

◎^{だん}暖^{だん}をとる術^{すべ}なき黒河^{こっか}星^{ほし}月^{つき}夜^よ

二、シベリア^{しべりあ}鉄道^{てつどう}・・・

黒龍江^{こくりゅうこう}を渡^{わた}ればブラゴイ^{ぶらごい}チェンスク^{ちえんすく}、道路^{だうじ}は、玉石^{ぎよく}を並^なべてコン
クリート^{こんくりーと}を流^{なが}しただけ、軍靴^{ぐんか}ではとて歩^あけない。靴下^{くつした}を靴^{くつ}にかぶ
せやっ^{はや}と貨車^かにたどり着^つく。ソ連人^{それんじん}は「エー、ヤポンスキー^{はや}」と囃^{はや}
したてる。「死^{ほりよ}すとも捕虜^{ほりよ}の辱^{はずかし}め^{はずかし}を受け^{はずかし}るな^{はずかし}」と教育^{こくう}されてきたが、
今^{いま}は何^{なに}をも考^{かんが}えている余^よ地^ちはない。

三、貨車^かで・・・

何時間^{なんじかん}も停車^{ていしや}している。止^とまったと思^{おも}ったらすぐ出^い発^{はつ}する。用便^{ようべん}

も給食給水も不定期。その合間^{あいま}を見ての用便、時には屍^{しり}もふかずに飛び乗る者、糞^{ふん}を踏^ふんづけたまま引き上げられる者、また、走行中の放尿^{ほうにょう}は後の貨車^{きり}に霧^ことなって飛び込み、前の貨車のものは飛び込^こんでくる。

どこに向かって進んでいるのか全^{まった}く不明。太陽の位置で西に向かっているのは確実となる。誰^{だれ}かが「海だ」と、海？バイカル湖^こ？

◎帰れぬと覚悟^{かくご}して見しバイカル湖^こ

ふる里^こを恋ふ夏服のまま

四、タシケントへ・・・

太陽の位置から貨車は南下^{ようす}している様子。そして作業地のタシケントへ着く。12月間近^{まちか きび}、厳しい寒さは無さそう。煉瓦^{れんが}を焼く窯^{かま}が住み家である。

ベッドは木製^{もくせい}の2段で通路の両側に並んでいる。収容所^{なんきんむし}は南京虫(※3)と共存で、寝^ねにつく時^つから南京虫^{なんきんむし}との戦^{いくさ}が始まる。ある夜、2階の戦友が「秋元、来てみてくれ」と。2人^{さわ}で触^{さわ}ってみた。寝る時までは元気だったのに！作業場での彼の話^{さくや なんきんむし}「昨夜は南京虫^{すご}に凄^くく食^くわれた。亡^なくなった友にいたのがみんな俺^{おれ}のところに来^くたらしい」と。

五、作業・・・

煉瓦^{れんが}作り、鉄の車の一輪車を鉄レールを走らせての作業である。

土運びはまだ良い。焼けた煉瓦^{れんが}の窯^{かま}出し、これがひどい。熱気^{もつもつ}と濛々

たる粉塵^{ふんじん}に病^{たお}に倒れるもの、帰国後^{りょうよう}も療養^{りょうよう}せねばならぬ戦友もおつ

た。一輪車の操作は技術^{よう}を要した。

六、治療・・・

薬は帰国まで見たことはない。持っていた“ライオン歯みがき粉”

は貴重品で、傷にはすり込み^こ、腹痛^{ふくつう}、風邪^{かぜ}にも効いた万能薬^きである。ばんのうやく

それが無くなった後は薬は全くなく、腹をこわした時は木炭を用い

た。健康診断^{しんだん}は月に一回、女軍医^{しり}が尻^{つま}の皮を摘み、早く戻れば労働

可である。

七、食糧等・・・

普通^{ふつう}は黒パン300グラムというが、燕麦^{えんぼう}の皮の混ったすっぱい

パン、そこに塩づけしたキャベツを湯^{もど}で戻したスープ少々、粟^{あわ}や

玉蜀黍^{とうもろこし}の粒が入っていたら上の上で、ノルマが達成できなければ減

らされてしまう。暗い灯^{あかり}の下での配分係は命がけで行う。

◎パン分けに鋭^{すど}い眼^{まなこ}懐^{ふと}手^{ころで}

正月^{ほりよ}や捕虜^{ひとわん}は一椀^{かゆ}ゆるき粥

八、雪隠^{せっちん}・・・

バラック建^{だて}の下に20個ほどの穴がある。これがトイレで、使用時間帯は作業前の同時刻、その異様^{いよう}さは筆舌^{ひつぜつ}ではつくすことはできない。

九、靴^{くつ}・・・

支給された靴^{くつ}は底が木、作業ができぬので、ベルトを合わせ平べったい靴^{くつ}を作って履^はいていた人もあった。

十、帰国・・・

昭和23年10月、ナホトカで迎^{むか}えの名優丸^{めいゆうまる}を見る。服装検査の時間が長すぎる。船内は復員兵^{ふくいんへい}が多く身動きできない。舞鶴港^{まいづるこう}が見えて来た。日本の緑、白衣の天使、嬉^{うれ}しきいっぱい、夢でなければいいなと思った。家では両親と妹が待っていてくれた。久しぶりの家での入浴、寿司^{すし}での夕食、日本は負けても、こんな美味^{おい}しいものを口にできるのはいいと思ったが、実は私のために少しずつ母がためておいた米であり、母は病^{びょう}床^{しょう}にあったが、私の帰国^{こっくわい}の報^{ほう}を得て跳^とび起き、床を上げてしまったということでした。

※1 八路軍^{はちろぐん} … 日中戦争時に華北^{かほく}方面で活動した中国共産党軍

^{こうぐん}
(紅軍) ^{つうしょう}
の通称である。

※2 満人 … ^{まんしゅう}
満州民族のこと。

※3 ^{なんきんむし}
南京虫 … トコジラミのこと。吸血性の寄生昆虫。刺され
ると激しいかゆみが生じる。